
機械仕掛けの神

オズワルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機械仕掛けの神

【Nコード】

N4838V

【作者名】

オズワルト

【あらすじ】

俺は、死んでいるのも一緒だった。

父さんはいない。母さんは俺を必要としていない。友人は皆つわべだけの関係だ。俺を必要としているわけじゃない。先生は俺じゃなくたって、別に生徒なら誰だって構わない。誰も本当に俺を必要としているわけじゃない。だったら俺は、生きていてもいなくても一緒じゃないか。

でも死ぬのは怖い。だから生きている。死んだように生きている。ああ、くだらない。サイテーだ。サイアクだ。だったらこんな世界、

ぶっ壊れちまえ。

黒田の思いに答えるかのように、世界は崩壊する。空からやってくる球体。目の前に表れる男。学ランを着た少女。そして巨大なロボット。

黒田は闘う。生きるために。それ以外に、理由はなかった。例え、死んだように生きていても、本当に死ぬのだけは嫌だったから。

超兵器ロボットアクション。

遠い遠い宇宙の果てで

「やあ。君ならたどり着くと思っていたよ」

男が口を開いた。

そこには男の座る玉座以外、何も無い。壁も屋根もない。全ては破壊され、玉座だけが残っている。

男の正面には鋼鉄の巨人がいた。黒い色をした、三十メートルほどの巨人だ。

デウス・エクス・マキナ
機械仕掛けの神と呼ばれるそれを、男は見上げ、語りかけていた。

「ああ、来たさ。アンタを殺すためにな」

広大な空間に声が響く。それは機械仕掛けの神の中の、少年の声だった。

少年の身体にはいくつもの配線に埋もれていた。赤、青、灰色のそれに、少年の身体がまみれている。

手に足に頭に首に胴体に、生體的に蠢くそれが同化していた。皮膚に差し込まれ肉と一体化し、機械仕掛けの神と少年を一つにしている。

少年の身体は機械仕掛けの神のものであり、機械仕掛けの神の身体は少年のものだった。

一人と一機は一つとなって、その全てを共有していた。

「そうだろうね。人の器を捨て、機械仕掛けの神となった君に、それ以外の何かがあるはずがない」

玉座から立ち上がった男は言葉を続ける。

「さあ、殺し合おう。そのためのこれまでなんだ。存分に最高に限界まで殺し合おうじゃないか」

男の背後の空間が裂けた。

真つ暗な暗闇の中から、白い巨大な腕が現れる。

白の機械仕掛けの神。少年の黒の機械仕掛けの神とは、対の存在。「言われなくてもそうするさ。俺はアンタを許せない。どんな理由があるうと、アンタだけは許せないんだ」

少年、つまり機械仕掛けの神が何も無いはずの場所から巨大な刀を出現させる。

機械仕掛けの神のボディほどの大きさがあるそれを、軽々と振り回し、構えた。

「俺がアンタを殺してやる」

「そうだ。それでいい。殺しあおう。ただひたすらに殺しあおう！」

男が白の機械仕掛けの神に溶けるようにして、乗り込んだ。

白の巨人はその手に二丁の拳銃を出現させ、狙いを定める。

「さあ、はじめようか」

黒と白、二機の機械仕掛けの神の攻撃が衝突する。

極限まで研ぎ澄まされた刃と、究極に精巧な弾丸。

二つはぶつかり合い、あたりに衝撃を生む。

玉座が吹き飛ばされた。瞬く間にバラバラになる。そして二機の

周囲にはもう、何も無くなっていた。

「アンタだけは、俺のこの手で消し去ってやる！」

少年は吼える。その身体はもう人ではない。機械仕掛けの神の一部となっている。

全ては目の前の敵を倒すためだった。少年に、絶望と憎しみと怒りを与えた男を倒すために。

「ああ、すばらしい！ そうだ。そうでなくては意味が無い！」

男は、酷く歪んだ笑顔を見せた。心の底から闘いを楽しんでいる。

白と黒の機械仕掛けの神は、ただ広がる何も無い大地で闘う。

互いの思いを一撃に籠め、互いを破壊する為に、闘う。

その衝突は、星すらも破壊してしまうような衝撃を生んだ。

そして、それは舞い降りる 1

黒田真くろだしんは高校生二年生だ。

部活には所属しておらず、成績は中の上。得意教科は数学で、嫌いな教科は化学。運動は好きではないが、得意といえば得意だ。身体を動かすのが嫌いなのだ。面倒くさい、と思ってしまおう。

熱中している事はサッカー観戦。身体を動かす事は嫌いだったが、見る分にはかまわなかった。むしろ、好んでいる。黒田真はスポーツが嫌いなのではない。身体を動かすことが嫌いなのだ。

黒田真はここ最近、何かに一生懸命になったことが無かった。幼かった、小学生の頃は何か打ち込んでいたこともあったかもしれない。

黒田真は退屈していた。

毎日同じ事の繰り返し。退屈な授業を受け、退屈な話を聞いて、退屈な勉強を行う。

生きてはいる。だがそれだけだ。何かをなしているわけではない。自分に存在価値を見出せない。

熱中しているはずのサッカー観戦でさえ、眠気が襲ってくればすぐに中断する。夜遅くに起きて、リアルタイムで見たい、というほどの意欲も無い。熱中している、ではなく、興味を持っていること、といった方がいいかもしれない。

どれもこれも下らない、と思っていた。何もかもが無駄にしか思えなくて、全てのこと本気になれなかった。

生きている意味を見出せなかった。しかし、死ぬのは怖い。だから生きている。ただそれだけ。

興味の無いことをやらされて、無駄に人生を浪費していくだけの日々を過ごすのが、嫌で嫌でたまらなかった。

だから思っていた。こんな世の中、ぶっ壊れてしまえ、と

黒田の目の前で、女性が踏み潰された。胴から下が圧迫され、千切れる。悲鳴を上げ、苦痛に悶え、大量の血を流し、女性は死んだ。「なんだよ、これ……っ！」

数え切れないほどの巨大な球体型のロボットが町を歩き回っていた。三十メートルくらいだろうか。その手に持っているのは、同じく巨大な重火器。無数の弾を吐き出し、人々を肉塊に変えてゆく。黒みを帯びた血が、大通りに撒き散らされていた。立ち並ぶビルには無数の弾痕。道路を行く車は踏み潰され、弾丸を打ち込まれている。逃げ惑う人々に銃口が向けられ、ほどなくして殺される。

「おかしいだろ、こんなの！」

黒田は、いつもどおり学校へと向かう途中だった。暇で退屈で嫌でしょうがない毎日の繰り返しを、今日も行うはずだった。

家を出て駅へと向かい、電車で揺られる。途中で二つの乗り継ぎを行い、学校の最寄り駅で降りる。そして、駅から大通りを通って学校へと向かう途中、突然に世界が一変した。

空から、巨大なロボットが何十体も降ってきたのだ。

黒い色をした球に手足が生えたようなそのロボットは、瞬く間に街を破壊していった。黒田の横にはコンビニエンスストアがあるはずであり、視線のその向こうには十七階建ての高層マンションがあるはずだった。しかしそれらは、完膚なきまでに破壊され、原型をとどめていない。

黒田がまだ死んでいないのは、ただの幸運だ。街のいたるところで人が死んでいる。黒田と同じように通学途中のだった生徒。通勤の途中だったサラリーマンやOL。大学に向かう途中だったの男女や、パチンコ店の前にならんでいた男性。コンビニで働いていた店員。ファーストフード店のアルバイト。朝から飲食店で仕込をしていた男。学校の教師。それらの人々が、手当たり次第に殺されていた。

る。

球体のロボットは道路を踏み荒らし、そして車に乗っている人々ごとそれらを潰した。血が窓を覆い、勢いよく真つ赤な液体が車の隙間から漏れてゆくのが黒田の目に映っていた。

ロボットの内の一体が、銃口を黒田に突きつけた。

反射的に、黒田は走る。死にたくないと思っていた。黒田は死を恐れている。神を信じていない彼は、死後の世界も信じていない。

弾丸が吐き出された。コンクリートの地面に無数の穴が開き、そして周囲の人々に鉄の塊がぶち当たった。黒田はそれを横目で見ると、感情は全くわかなかった。死に掛けているという、この状況を認識することだけで精一杯だった。

銃口は別の場所へと向けられる。時計屋が破壊され、その中で怯えていた老人がその身体の大部分を抉り取られた。角で身を潜めていた客は、もろに弾丸を受けて肉片となった。

黒田は逃げた。

死にたくなかった。終わりがたくなかった。その一心で逃げた。

辺りでは人々が弾丸に貫かれ、ロボットに踏み潰され、血を噴出している。地獄だった。少なくとも、黒田が知っている日常とは遠くかけ離れた光景だった。

死にたくねえ！

それだけを強く思い、黒田は逃げる。

そして、それは舞い降りる 2

やばい。

通りの真ん中で、黒田は銃口を突きつけられていた。周囲には数え切れないほどの死体が転がっている。その全てが身体の一部を無くし、血を流し、死臭を漂わせていた。

周りに生きている人間はいない。全て死んでいる。遠くでは銃声とロボットの足音と悲鳴が聞こえていた。だがそれは、少しずつ小さくなっていく。

黒田の右足からは血が流れていた。先程、脛辺りを銃弾が掠めていた。それは容易に制服を破って足の肉を削ぎ執った。骨までたどり着いていなかったのは幸いだ。まだ動くことはできる。しかし、痛みが邪魔して、全力で走れない。

それでも黒田は何とか動く。狭い路地の中に逃げ込んで、ロボットと自分の間に建物を挟む。

だがロボットの銃弾はコンクリートの壁を意図も簡単に貫いた。弾丸がアスファルトの地面に突き刺さり、破壊されたコンクリートの壁が飛び散る。黒田は走ってそれから逃げる。黒田を追いかけるように、背後では弾丸がコンクリートの壁を打ち破っていく。

爆音と轟音が黒田の耳に鋭く鳴り響いていた。恐怖が黒田を駆り立て、足を緩める事を許さない。もしもそうすれば、黒田は死んでしまう。

「嫌だ……ッ！」

黒田は叫んでいた。死という恐怖に怯え、しかし生にしがみついているわけではない。生きることが望んでいるのではなく、死ぬことを恐れている。

黒田は走った。そのたびに右足の鋭い痛みが全身に回る。心臓は張り裂けそうなほどに鳴り響く。心の中の、暗い底なしのどこからやってくる恐怖と言う感情が、身体を支配していく。

呼吸は荒くなっていく。嫌な汗が全身から流れでゆく。

「死にたくない……ッ！」

それでも、それらは黒田を殺そうと、やってくる。

狭い路地の先に、黒い球体が待ち構えていた。背後では銃弾が着弾している。

挟まれた!?

背後には迫ってくる銃弾が。前方には構えられた銃口が。

足を止めれば、銃弾が黒田を襲う。そのまま走ったとしても、銃弾が黒田を捉える。

どうしようもない、絶体絶命。

死ぬ？ まさか。そんな。嘘だ。嘘だろッ!?

路地は直線。入ってきた場所と先の球体のいる場所以外、道はない。

黒田はそれでも細い路地を走る。そうしなければ死んでしまうから。もしもその先が死だったとしても、それでも一瞬でも長く生きようともがいていた。

嫌だ、嫌だ、死にたくない!

その時だった。

目の前の球体が、巨大な何かに押しつぶされたのは。

「え……?」

黒田の前には拉げた球体のロボットがあった。その上に、鋼鉄の、黒い色をした巨人が鎮座している。

そして。

「やあ、君。間一髪だったね」

黒田がその声に気がついて横を見ると、そこにはスーツを着た男が浮かんでいた。黒田の走りとあわせ、宙を飛行している。

「は、え、ちよっ？」

黒田は困惑した。当たり前だ。空を飛ぶ人間なんて、いるはずがない。

「そんなに驚かなくても大丈夫。俺は味方だ。君らの仲間だ……つて、こんな状況じゃまともに会話もできないか」

背後には以前、いくつもの弾丸が着弾していた。目の前の一機が動かなくなったとはいえ、それだけで十分、恐怖だ。

そして、それは舞い降りる 3

「ちょっと待っててくれよ」

男はそういうと、突然、消えた。

「は!？」

その数秒後、轟音。そして銃声が止んだ。

何が起こって……。

「もう大丈夫だよ」

またもや唐突に黒田の隣から声が聞こえた。

目をやると、そこには先程の男がいた。笑顔で黒田に語りかけている。

「あいつは俺が倒した」

「え、アンタが……? どうやって……?」

「それは企業秘密。教えるわけにはいかないなあ」

男は黒田の問いに、おどけて答えた。

黒田は足を止める。同時に、男も止まった。飛行をやめ、地面に足をつける。

怪しい雰囲気の子だった。若い男だった。スーツを着ていて、ネクタイをしている。背は成人男性よりも少し高いくらいだろうか。

「ところでだ。黒田真君」

「なんで俺の名前を知って……」

黒田は目の前の男に、今、始めてあった。当然黒田は男の名前を知らないし、男も黒田の名前を知っているはずはない。それなのに、男は黒田の名を呼んだ。

しかし男は黒田の問いに答えず、言葉を続ける。

「俺は、君みたいな人間を探していたんだ」

そして、それは舞い降りる 4

黒田の両親は、彼が幼い頃に離婚していた。

理由は父親の不倫。それから黒田は母親と二人で暮らしていた。だが、母親は黒田を必要としていなかった。

自分を捨てて別の女性へと走った父親にあてつけるように、夜遊びを繰り返す毎日。そこに黒田はいらなかった。欲しいのはただ、自分が誰かに愛されているということ。それは親子の愛ではなく、異性としての愛。

母親の声は一週間に聞くか聞かないか。金だけが毎日机の上に置かれ、食事の用意も洗濯も何もかもを一人で行う。うわべだけの、親子の関係。

小学校でも中学でも高校でも、いつでも黒田は一人だった。友人はいた。しかし、それでも黒田は一人だった。何もかもをうわべだけの関係に思っていた。

結局、黒田自身が本当に欲されているわけではないから。他の何かの前に、霞んでしまう存在。母親の中での、自分のように。

無意味で、興味のもてない毎日。
必要とされていない自分。
存在価値のわからない己。

黒田はそんな自分が嫌だった。しかし、どうやって変わればいいのかかわからない。

一人でいる時は気分がよかった。本当は誰からも必要とされていないということ、認識しなくて済むから。けれど一人でいればいるほど、他人は離れていく。自分の存在が薄れていく。

だから世界が壊れてしまえばいいと思った。こんな自分を取り巻く世界が、なくなってしまうばいいと。自分に生きている意味をくれない世の中が破壊されてしまえばいいと。

生きる意味の見つけられない黒田は、そんな事を思っていた。

黒の巨人の胸部が左右に開く。戦闘機のコックピットと少し似ていて、操縦桿とシートがある。シートは手前に一つ、奥にもう一つ。複座式だ。

黒田は巨人の手の上に乗っている。その横には、宙に浮く男。黒田はまだその男の名前を聞いていなかった。聞いたが、答えてもらえなかった。

「これは機械仕掛けの神と呼ばれる兵器、その中でも特別な機体だ」
デウス・エクス・マキナ
黒田達の周囲を球体のロボットが取り囲んでる。重火器を構え、弾丸を打ち出している。

それでも黒田達には届かない。見えない壁が、それを阻んでいた。何故そうなっているのか、黒谷はわからない。だが、横にいる名前すら知らない男が関与しているのだろうと言う事は察しがついた。

巨人の手は動いていき、黒田をコックピットまで運ぶ。

「入ってくれ」

男の声に従い、黒田は機械仕掛けの神と呼ばれたその中に身体をくぐらせた。途端、入ってきた場所が閉まり、黒田は閉じ込められる。

光の一切が遮られ、黒田の視界は真っ黒となる。手探りであたりを探っている内に、シートを手で見つけた。何をしてもいいのかわからない黒田は、ともかくそれに座る。

それから数秒後。コックピットの中に光が生まれた。黒田の目の前を始点とし、それは瞬く間に黒田の視界に光を生み出していく。

それは、機械仕掛けの神の視点だった。頭部から見える光が、その周囲の光景が、コックピットに三百六十度、映し出されている。

「 a ア あ 」

黒田の背後で声が出た。反射的に振り向く。するとそこには、光があった。それは次第に形をつくっていき、人の、少女へと変わっていく。

綺麗な顔立ちの、美人というより人懐っこい顔をした少女。金髪に青みのかかった瞳。見た目は黒田と同じくらいの年齢だ。服は黒田と同じ制服。男物で、学ランを着ている。

少女は黒田と目をあわせ、そして微笑んだ。

「よろしく。シン」

またも、黒田は初対面の相手に名前を呼ばれる。そもそも、目の前の少女は人なのだろうか。そんな疑問が、黒田の頭の中にある。

そして、それは舞い降りる 5

なんなんだ、こいつら……。

黒田は思う。

空から降ってきた謎の巨大な球体。

突然現れた怪しい男。

自分が搭乗しているロボット。

そして、目の前の自分と同じ格好をした少女。

「それじゃあ、黒田君。バリアは解除するから、後は適当に頑張れ」
先程の男の声が聞こえてきた。同時に、球体と黒田達をの間を阻んでいた見えない壁がなくなり、銃弾が黒い巨人を襲う。

「なんなんだ、あいつ……！」

コックピットの中を衝撃が襲う。黒田はシートに座りなおし、操縦桿を握った。

けど、こんなのどうすりゃいいんだ？

恐らく、レバーを引いたり足元のスイッチを踏んだり、そういった事をすれば、黒の巨人が動くのだと言う事は黒田にも想像できた。しかし、どうやればどういう風に動くのか、全くわからない。

無数の球体が迫ってくるのが周囲のモニターに映し出されている。一歩一歩ゆっくりと、だが確実に。このままでは押しつぶされてしまつのではないかと黒田に感じさせる。

「焦らないで」

背後から声が聞こえてきた。学ランを着た少女の声だ。

「大丈夫。ヴァルはこれくらいじゃビクともしないから」

「ヴァル？」

黒田が少女に尋ねたその瞬間。

頭の中に、何か膨大な情報があふれ出して来た。

黒田はそれに対し、吐き気を覚える。無理矢理に頭の中にそれが流れ込んでくる。拒絶することができず、頭の中を無遠慮にかき乱

す。

「か……は……っ」

黒田は身体を前のめりに屈めた。口からは涎が垂れ流しになっていた。額には脂汗が浮かんでいる。

「拒絶しないで。受け容れて。それは、シンに必要なものだから」

コックピットは未だに振動を続けている。球体はもう目と鼻の先。銃口は突きつけられ、ゼロ距離から銃弾が放たれようとしている。

そして、黒の巨人が動いた。

雄叫びを上げながら大きく跳ね、取り囲んでいた黒い球体を弾き飛ばす。巨人は数百メートル上空まで軽々と舞い上がった。

無数の弾丸が巨人に襲い掛かる。それを受けながらも降下し、そして着地と同時に数体の球体を踏み潰す。街に走る大きな振動。この星にはない球体の合金がバラバラになり、通りに撒き散らされた。その一部がまだ原型をとどめていたビルに当たる。その衝撃で窓ガラスが何十枚と割れた。

巨人はすぐそばにいた球体の腕を掴む。抵抗するそれを力で振り切り、円を描きながらハンマー投げのように振るった。ロボットは互いに激突してそのボディを拉げ、吹っ飛ばされる。

「やっぱり、思ったとおりだ」

空に浮かぶスーツを着た男は呟いた。真上から巨人を見下ろしている。

「俺の思ったとおりだ。君には才能がある。まさに、探していた人材だよ」

男の眼下では黒の巨人が街中の球体を破壊していた。

そして、それは舞い降りる 6

おかあさん、どうして泣いてるの？

幼い頃の記憶。それは、黒田が小学生になる前の日のことだった。リビングで母親が泣いていた。机に顔を突っ伏して、泣いている。家の中は荒れ果て、雑誌や新聞、食器や衣類までもがいたるところに散らばっていた。全て、母親がやったことだ。

幼い黒田はそれを見ている。何故母親がそんな事をしたのか、黒谷はわからない。

おとうさん、どうして出て行っちゃったの？

黒田の質問に、母親は答ええない。悲しみと憎しみの入り混じった嗚咽を繰り返すだけ。

三日前だ。父親が家を出て行ったのは。

その時、黒田は別れの言葉を告げられた。ただ一言、「じゃあな」と。

黒田は父親に向けて、母親と同じ質問を投げかけた。

しかし、父親は答えなかった。幼かった黒田は、その意味を理解する事ができなかった。

ねえ、おかあさん。

母親の服を黒田は引っ張る。教えて欲しかったのだ。父親がいなくなつた理由を。わからないままにしておきたくなかつたのだ。

「あんたが！」

顔を突っ伏したまま、母親が叫ぶ。黒田の身体が突然の声に驚き、ビクついた。

「あんたのせいだ！あんたがいたから、あの人は私を捨てたんだ！」
泣きじゃくる母親の声が、怒りに狂った母親の声が、リビングの
中に響く。

「僕のせい……？」

「そうじゃなかったら、あんな女……っ！あんたがいたから……っ
！」

「僕が悪いの？」

「あんたがいなければ、あの人はずっと私と一緒にいてくれたのに
っ！」

「僕は、いらなの？」

「あんたがいたから！あんたさえいなければ！」

「僕は、いない。」

鋭い母親の言葉は、幼い黒田の心を砕いた。

荒い息を黒田は吐く。間を空けずに空気を取り入れ、そしてすぐ
にそれを吐き出す。

心臓がうるさく鼓動していた。背中汗で濡れ、シャツが皮膚に
張り付いていた。黒田は学ランを脱ぎ捨て、額の汗を拭う。

操縦桿を前に押しやり、足元のレバースイッチを調節する。

巨人が疾走した。その身に受ける弾丸をもとせせず、球体の密
集したその場所へ接近する。

「ティルヴィング！」

黒田が叫ぶ。巨人の右拳が球体を捉えた。球体と拳の衝撃が、周
囲に走る。そしてそれは、周辺の全ての球体のボディをバラバラに
砕く。人の大きさよりも小さい、細かい破片に。

ティルヴィング。黒田の駆る巨人、ヴァルドギウスに装備された、
破壊の右腕。ありとあらゆるものを破壊し、撃滅する。

観察者 1

観察者^{ウォッチャー}。スーツを着た男はそう答えた。

「観察者、つまり俺の仕事は、宇宙の平和を守る事だ。モットーはラブアンドピース。愛と平和だ。戦争なんてもつてのほか。星の間での戦争行為、侵略行為を止める為に尽力してる」

黒田は崩れかけた壁にもたれかかっていた。すぐ横に、黒い鋼鉄の身体を持った巨人が鎮座している。目の前には観察者^{ウォッチャー}と名乗る男。そして黒田の隣では、学ランを着た少女が瓦礫に腰掛けている。

「俺たち観察者が造られたのは、今から三千万年以上前。その時からずっと俺はこの仕事を続けている。俺の本体、ようするに人格データは、ここから遠くはなれた星にある。生き物じゃないんだ。俺は。スーパーパワーで全宇宙の生命を守り、戦争行為を行う星を説得し、それが受け容れられなければ武力制裁をしても止める。愛と平和の為にね。どうだい、カッコいいだろ？」

「なるほど、と黒田は思う。」

男の行為に若干の納得がいった。言っている事は支離滅裂だ。理解できるようなことではない。急に目の前に表れたのも、突然に球体のロボットを破壊したのも、全てこの男だ。超能力の類が使えるのかもしれない。信じられないような事でも、黒田は納得できた。街は破壊されている。ビルは折られ、店は半壊し、道端には肉片が飛び散っている。死臭が漂い、真っ赤な血がそこから中に流れている。

頭上には太陽が輝いている。真っ青な空に、わずかな白い雲。いつもどおりの空。それなのに、地上は地獄に等しい。

黒田達の周囲に人はいなかった。黒の巨人を警戒しているのか、それともそもそも人などもういないのか。

どちらにせよ、この状況は無茶苦茶だ。そして、それが現実ならば、男の支離滅裂な発言も少しは理解できるといふものだ。

それでも、納得のいかないことがある。
「だったらあんたは、どうしてあいつらをあんたの手で倒さなかったんだよ」

男はロボットを一瞬で破壊した。方法はわからない。だがそれは確かな事だった。

しかし、男は自らが戦うことを選ばなかった。黒田を謎の鋼鉄の巨人に乗せ、戦わせたのだ。

「何でだ。答えろ」

「いやあ……それは……」

男は口をもごもごとさせる。躊躇っている。照れくさそうに。

「俺たち監視者は全部で六人いたんだ。皆それぞれ機械仕掛けの神デウス・エクス・マキナつていう切り札を一体ずつ所有しててね……」

男は頭をかきながら喋る。

「俺たち監視者は所詮はデータだから、現実には干渉するには限界がある。全力ではむかわれたら太刀打ちできない。そのため力が機械仕掛けの神なんだ」

「その機械仕掛けの神つてのは、あのヴァルドギウスとかいうヤツみたいなものなのか？」

「そう。頂上の力を持った鋼の巨人。どんな悲劇も救済する究極の救世主。それが機械仕掛けの神デウス・エクス・マキナ。ヴァルドギウスはちょっと違うんだけどな。まあ、それをさ、なんとというか、油断している隙に……その……」

「はつきりと言えよ」

奇立ちが黒田の中にこみ上げてくる。はつきりと言わない男に対し、ややきつい言葉を投げかけた。

「機械仕掛けの神を六機全部、奪われちゃってさ。しかも俺以外の

監視者のデータサーバーは破壊されちまった」

「はあ？ なんだよそれ。油断した隙につて、その機械仕掛けの神つてやつは『どんな悲劇も救済する究極の救世主』なんだろ？」

先程男はそう言った。黒田はそれを聞いていた。しかし男は俯きながら頭をかくだけだ。

「……わけわかんねえ。大体、ヴァルドギウスつてのにはあんたが乗ればいいじゃないか。どうして俺が乗る必要がある」

「ヴァルはね、監視者ウォッチャーに扱う事はできないの」

それまで黙っていた少女が突然に口を開いた。

黒田はそちらに視線を向ける。少女は黒田に笑顔を見せた。男は相変わらず照れたように頭をかいている。

観察者 2

少女は立ち上がり、黒田の手を握った。

「シンに乗ってもらわなかったら、ヴァルは戦えなかった。ヴァルじゃないとあいつらを倒す事はできない。感謝してるよ。ありがとう、シン」

まだ名前も知らない少女の瞳から、黒田は無言で目を逸らした。真っ直ぐに自分を見てくるそれを見なくなかったのだ。

「ま、そういうことだからさ。これからもよろしくたのむよ、黒田君。俺にはヴァルドギウスは扱えないんだ。君には才能もあるし、大丈夫だ」

その声の主は黒田に手を差し出してきた。黒田は少女に握られている手を半ば強引に振り切る。少女はそれに対して表情を変えるところではない。相変わらず笑顔だ。黒田は意識的に視界の外に少女を追いやる。

「あんだ、名前は」

男を睨みつけながら黒田は口を開く。差し出された手を握ろうとはしない。

「名前？ 名前か。そうだな、神崎、かな。どうだろう。君的にはこの名前俺にあってると思う？ 俺さ、今まで名前なかったから、即興で考えたんだ。それにしてもちょっといい名前だと思わないか？ 下の名前は大事だから、ちょっと時間かけたい。また今度だな期待しておいてくれ」

「……知るかよ」

「つれないなあ。これから長い付き合いになるかもしれないんだ。仲良くしようぜ」

だが、黒田は男の手を握らない。

「信用したわけじゃない、か」

「愛と平和を守るだの、観察者だの、三千万年前だの、機械仕掛け

の神だの、そんなわけわかんない事を言っている奴信用できるわけがねえ」

「それもそうだ」

神崎と名乗った男は黒田の言葉に頷く。

それを見た黒田は舌打ちをして、ヴァルドギウスに向かって歩き出した。

「どうやら俺、嫌われてるのかもしれないね」

肩をすくめ、神崎は呟いた。

「シン、どこ行くの？」

少女が黒田の後を追う。が、黒田は少女を無視した。振り向こうとしない。返事をしようとしてもしない。そして、ヴァルドギウスの機体をよじ登り、コックピットにたどり着く。

「ねえ、シン」

少女の声を遮るように、黒田はヴァルドギウスのコックピットハッチを閉じた。

中には黒田一人。光のない、真っ暗な空間。それからほんの数秒、黒田の視界に光が生まれる。コックピット内部に、巨人の視界が映し出される。血塗れの廃墟がコックピットの側面に現れる。

黒田は操縦桿を握り、それを引き上げた。鎮座異していた巨人が立ち上がる。

そのの動かし方を教えられたわけではない。元々知っていたわけでもない。戦闘の前、ヴァルドギウスに乗り込んだ時の、黒田の頭の中に入り込んできた大量の情報。それが、ヴァルドギウスの操作法だった。

だから動かせる。慣れた手つきで、当たり前のように。黒田の脳内に送り込まれた情報が、それを可能としている。

「だからシンってば、どこに行くの？」

突然、背後から声が聞こえてきた。黒田は驚き、振り返る。

そこには学ランを着た少女がいた。ハッチの外にいななければならぬはずの少女が。

「お前、なんで」

「私とヴァルは一緒だから」

少女は笑顔を黒田に向ける。

「そういえばまだ自己紹介したなかったね。私はヴァルのサブオペレーター。名前はノルン。でもあんまりこの名前好きじゃないから、ルアって呼んでね。これからよろしく。シン」

向けられたその笑顔を、黒田は困惑しながら見つめていた。

こいつら、一体なんなんだ？

神崎と名乗った男は、自分が三千万年前の作られた存在だといった。ヴァルドギウスもそれと同じ時に作られ、そして「何もかもを救済する神」だと言っていた。

それはわかる。理解も納得も完全にしているわけではないが、一応頭の中には入っている。

それにしてもだ。突然現れた球体のロボットから神崎という男、そしてノルンという少女。そして黒の巨人、ヴァルドギウス。

ともかく一つだけ、黒田にわかっていることあった。

意味のない、くだらなくて退屈な日常は、間違いなく崩壊したのだ。

半壊した二階建て一軒家のリビング。壁には大きな穴が開き、床に巨大な鉛弾が突き刺さっていた。テレビは横に倒れ画面にヒビが入り、テーブルはひっくり返って部屋の隅に押しやられ、イスはどれもがバラバラとなっていた。壁や床には真っ赤な液体が撒き散らされている。

死臭の漂う自らの家で、黒田はそれに視線を向ける。

一糸纏わぬ女性の死体は、右半身が大きく抉られていた。その近くには同じく裸の男性の死体。こちらは胸部から腹部にかけてがなくなっていて、首から上と下半身が分断されている。

黒田はそれらを見つめ続けていた。常人なら数秒で吐き気を催すようなその臭いに表情一つ変えることはない。目の前のグロテスクなそれに顔をしかめることもない。

数分か数十分か、ともかく長い時間それを見た黒田は、踵を返した。今にも崩れそうな家の廊下を通り、玄関を抜けて外へと出る。

家の目の前、そこにはヴァルドギウスが立っていた。玄関から出てきた黒田へとそれが顔を向ける。巨人はしゃがみ、巨大な手のひらを差し出す。黒田は黙ってその上に立った。

胸部のハッチが開く。黒田を載せた巨人の手がそこへと近づけられる。黒田はコックピットに飛び移り、シートへと身体を預けた。

「おかえり」

学ランを着たままの少女　先程ノルンと名乗った　が、黒田に声をかけた。

「何かあったの？　結構時間掛かってたみたいけど」

「別に。お前には関係ない」

吐き捨てるように黒田は言った。

黒田がレバーを握る。ハッチが閉まり、巨人が立ち上がった。

「これからどうするの？」

ノルンの言葉を見殺し、黒田は操縦桿を操作した。巨人が強く地面を蹴る。コンクリートには巨大なクレーターができ、周囲の地面は大きく揺れた。壊れかけの家がその衝撃で崩れていく。

ヴァルドギウスは一気に数百メートルの高さを斜めに跳躍する。そして、そのまま飛行を始めた。背部からウイングを出現させ、同時にブースターを吹かす。空気の壁を、鋼鉄のボディが切り裂いていく。う。

「あいつらは何者なんだ」

黒田は呟く。

「あいつらって誰のこと？」

「球のロボットだよ」

廃墟と化した街には、その残骸がいくつも転がっている。黒田が自分の家へと向かう途中、遭遇した時に破壊したものだ。

「えーっと、多分、侵略者」

「侵略者だって？」

「うん。あの機械に使われている金属はこの星ではまだ生み出されているはずがないから、他の星の兵器だと思うの。この星は大規模なテラフォーミングが必要ないし、だから狙われたんじゃないかな。ホームのメインサーバーが破壊されているから、確定情報は獲られないけれど。ごめんね」

少女の発言を、黒田は馬鹿馬鹿しいとは思えなかった。

廃墟と課した街、死体の山、漂う死臭は本物だ。目の前で何百人もの人間が殺された。なにもかもが破壊された。

そして今、黒田が乗っている巨大なロボット。操縦桿や手元のスイッチの操作で自在な駆動を可能としているのは、黒田の思考を読み取っているからだ。黒田はそれを知っている。

少なくとも、黒田はそんな技術を知らない。脳内に膨大な情報を送り込み、そしてそれを定着させるなど、フィクションでしかありえない。

しかし、それは間違いなくあるのだ。体験した黒田がそれを一番よく知っている。だから、ノルンの言っている事が本当の事なのだとわかってしまう。

操縦桿を引き上げ、黒田はヴァルドギウスを降下させる。通りのど真ん中にそれが着地した。地面が大きく揺れる。

黒田はハッチを開け、ヴァルドギウスから降りた。目の前の辛うじて原型を留めているコンビニに向かって歩く。

「何しにいくのー!?!」

ノルンが明るい声で尋ねる。黒田は鬱陶しさを感じながら、それに答えた。

「飯だよ」

コンビニのガラスのドアには、いくつものヒビが入っていた。いづれならば人が近づいた事を感じて自動でそれは開く。だが、今、

それは硬く閉じられている。

黒田はドアを思いつき蹴り飛ばした。ドアの全てにヒビが走る。だが、ガラスのドアは砕け散るわけではない。

黒田は舌打ちをし、もう一度ドアを蹴り飛ばそうとする。

「おいおい、器物破損は犯罪だぜ？」

背後から声が聞こえてきた。黒田はその声の主に視線を向ける。

そこには、ソフトクリームを頬張る神崎がいた。

「……アンタには関係ないだろ」

「関係あるさ。俺の仕事は宇宙の平和を守る事。法律違反だって、立派に平和を乱している」

「だから何だっつんだ」

「それに、無益な破壊は避けるべきだろう?」

神埼が指を鳴らす。すると、硬く閉ざされていたドアが自動で開きだした。

「これで通れる」

得意げに胸を張る神埼の顔を一瞥すると、黒田は何も言わずコンビニの中へと足を進めた。

「無視しなくてもいいじゃないか」

後を追う神埼。黒田はそれを完全に無視して、コンビニの棚を漁る。店内には菓子パンやサンドイッチ、ペットボトルが床に転がっていた。銃弾の衝撃やパニックになった客によって落とされたのだろう。

棚はその殆どが一部を破損している。ガラスやプラスチックが割れ、商品の上に降りかけられている。だが食す分にはなんの問題もないだろう。

店内に人の気配はない。死臭もしない。どうやら、全員店の外に逃げていたようだ。

黒田は店を回り、比較的商品がつぶれていなさそうなものを手に取った。飲み物を罅割れたガラスケースから取り出し、棚の菓子パンを数個選ぶ。

「へえ。コッペパンにぶどうパン、それに胡桃パンか。意外だな。君はそういうのが好きなのかい?」

黒田の手に取ったそれを見て、神埼が興味深そうな顔をしていた。さつきまで頬張っていたソフトクリームは、スイカバーへと変わっている。

「どうせならメロンパンとか焼きそばパンとか、そういうのを選べばよかったのに。飲み物だって、そんなお茶とかじゃなくて、ジュ

「スを選ぼうよ。そうだ。なんかお菓子ももっていこう」

一人で騒ぎ立てる神崎。黒田は視線すら向けない。ただ鬱陶しそうに眉をひそめている。

だが、神崎は無言を貫く黒田に対し、語りかける。

「何がいい？ 板チョコ？ ポテトチップス？ それともアイス食うかい？ どうせなら全部持つていこうか。金なんて払わなくていいんだ。非常事態だからね。ちょっとくらいの悪さは多めにみてくれてもいいだろ」

ほんの少し黒田が神崎に視線を向けた。

「やつとこつちを見てくれたね。あんまり無視しないでくれよ。そんな態度とられると、俺は寂しい」

スイカバーを下でなめる神崎。全く持って寂しいという感情が伝わってこない。黒田はさらに眉をひそめ、そして舌打ちをする。

「あ、これ、遊戯王の第7期第6弾パックだ。ははあ、懐かしいなあ。この表紙のカード、結構かつこいいよね」

神崎にはそれが聞こえていないようだ。カードゲームのブースターパックを手に取り、目を輝かせている。もしくは、聞こえている上で無視しているのかもしれない。

「知るかよ」

「まあまあ、そう言わずに。君も一緒にやらないかい、遊戯王。適当なパック八つずつ……いや、エクシーズとか融合でたら面倒だから九つのパックを開けてさ、それでデッキを組むんだ」

「興味がねえ」

「そんな事言わないでさ。一緒にデュエルしようぜ！」

「うるせえ！！」

黒田の怒鳴り声が、店内に響いた。

「……黙っててくれ。正直、イラつく」

それだけ言うと、黒田は店の外から出て行った。

残された神崎は、カードゲームのブースターパックを投げ捨てる。「一緒に遊んでくれる相手がいなきゃ、こんなものに意味はないよ」

なあ
「

そして虫を潰すように、それを踏みつけた。

コンビニを出た黒田は、声をかけられた。

「やあ、始めまして。兄ちゃん」

そこには、灰色のマントとフードを被った少年が立っていた。身長は百五十センチくらいだろうか。小学生のような背丈だ。

フードの中にはこれまた小学生のような幼い笑顔がある。黒田に向け、笑いかけている。

「お前は、誰だ」

黒田はその少年を知らない。廃墟の中で、死臭の漂う空気の中で、少年は笑顔でいる。周囲の惨状は目にはしているはずだ。血と肉が飛び散る道路を、鉄くずと骨が撒き散らされている街の見るも無残なその姿を、知っているはずなのに少年は、異常だ。

「僕の名前はシヨトル・ダ・サルファラント。遠い星から来たんだ」
黒田の制服には血や汗が染み込んでいる。しかし、少年の身につけている服には、一切の血がついてない。

少年の言う事は、すなわちこの星のものでないという事を意味している。

多分、侵略者。

先程のノルンが言葉が脳内に反芻される。

まさか、こいつがそうなのか？

外見は幼い子供にしか見えない。だが、その少年は球体の兵器の投下させた奴らの仲間だと言う。とても信じられたものではない。

そんな黒田の考えは数秒後、断ち切られる。

「ところでさあ、兄ちゃん」

少年の笑顔が暗いものへと変わる。
「いきなりで悪いんだけど、死んでくれない？」

薄暗い巨大な空間の中で、いくつかの小さな光が点滅していた。
弱々しく発光を繰り返し、銃数秒後、消えていく。

「この管理サーバーはこれで全部か？」

暗闇の中から声がした。声の主は大柄な、灰色のフードを纏った男だ。

その男の他には、二人の青年がいる。一方は大男と同じ灰色のフードを身に着け、もう一方は白いマントを羽織っていた。さらには仮面までつけている。

三人の前には二機の巨人以外、何も無い。空間だけがある。数分前までは、そこに巨大なコンピュータがあったというのに。

「そうだね。ここにある奴は全部破壊し終わった」

「あー、なんてーか、齒ごたえがなかったな。もう少し、楽しませてくれると思ったけどさ」

青年が背伸びをする。欠伸を上げると共に、足元の残骸を蹴り飛ばす。

「この性能が高すぎたからだろう。圧倒的過ぎだ。まあ、これくらいの方がなければウォッチャー観察者共の兵器にはなりえないという事か」

大男が背後に立つ、二体の巨人に視線を向けた。

一方は厚い装甲を持ち、大きなハンマーを背負っている。もう一機はそれに比べると細身で、身軽そうだ。二丁の拳銃を手に持っている。

「気に入ってもらえたなら嬉しいよ」

仮面をつけた男が言った。

「なんでアンタは裏切ったんだ？」

「飽きたんだよ。同じことの繰り返しに。それに、人間なんて俺た

ちがいていなくても、ずっと争ってばかりじゃないか。だったら、観測者なんていらぬ。だろ？」

「ま、それもそうだ」

数秒後、青年が思い出したように再び口を開いた。

「そういえば、シヨトルはどこに行ったんだ？」

「例の兵器のところだと。生き残りの観測者にも挨拶をしてくる、なんて言っていたぜ」

「えー、先越されちまったなあ。あいつと最初にやるのは俺の予定だったのに」

青年は肩を落とし、大げさに声を張り上げる。

破壊と断裂 2 (前書き)

超兵器同士の戦いは、書いていて楽しいです。
感想あったらお願いします。

少年は足元に転がっていた鉄パイプを拾った。それを地面に叩きつけ、自らの扱いやすい長さに折る。一メートルくらいの長さだ。「さあ、いくよ」

先程の発言に戸惑う黒田に向かい、少年は一瞬で間を詰めた。

鉄パイプが黒田へ肉迫する。高速で弧を描くそれが、黒田の肋骨を捉えようとする。

なっ。

鉄パイプを避けようと、黒田は身をよじらせる。パイプはワイシヤツをかすめた。何とか紙一重の所で回避する。

「やるじゃん」

少年は鉄パイプを振り回す。黒田は身を屈め、膝を折り、跳躍し、よける。

しかし少年の身体能力は黒田のその上をいつている。

黒田は決して運動ができないわけではない。平均的な高校生以上の身体能力は備わっている。少なくとも、小学生に劣るようなものではない。

だが少年は黒田を圧倒していた。外見からは想像がつかない、高すぎる身体能力。一瞬の跳躍で少なくとも五メートルはあった黒田との間を詰めた。鉄パイプを軽々と木の棒のように振り回す。黒田に回避以外の余裕を与えないほどの攻撃を繰り返す。

「もらったよ！」

「黒田君！」

その声と同時に、鉄パイプは淡い色をした壁に阻まれる。壁に直撃した鉄パイプは、拉げ、折れ曲がった。

「バリアか。ってことは……」

少年が呟く。その顔は僅かに微笑を見せていた。

「大丈夫かい!？」

「あ、ああ……」

神崎が黒田の元へ駆け寄る。壁は神崎が作り出したものなのだろう。

「シン！」

ノルンの声が周囲に響いた。ノルンの操作するヴァルドギウスの手が、少年を押しつぶさんと襲い掛かる。

「おっと」

少年はそれを後ろに飛んで回避する。

「逃がさないよ」

神崎が少年に向けて手の平を見せた。直後、いくつもの光線が少年を打ち貫く。

「ぐ……っ」

少年の四肢から血が流れ出た。人間と同じ、真っ赤な血だ。灰色のコートが朱色に染まっていく。少年の顔が苦痛に歪む。しかし、

それでも少年は笑っていた。

「ふふふ……やっぱり、ウォッチャー観察者だ」

少年は鉄パイプを手放した。血が地面に滴り落ちる。歪んだ笑顔のまま、少年は口を開く。

「それに、もう一機デブス・エクス・マキナ機械仕掛けの神を隠し持っていたなんてね。あ

つちの観察者は知らなかったみたいだけどさ！」

「あつち？それはどういう意味だ」

神崎の言葉を少年は無視した。変わりに手の平を上突き上げ、叫ぶ。

「来い、ローキルダム！」

少年の頭上、はるか上空から、それは落下してきた。

ヴァルドギウスと同じくらいの背丈の巨人。黒をベースとしたヴァルドギウスとは違い、装甲の色は紺。ヴァルドギウスと似ている

が、細かい装飾が違う。

背部にあるスラスタはヴァルドギウスのものよりも大きい。装甲はヴァルドギウスのそれよりも厚い。

腰や太股あたりにコンバットナイフの柄が収納されているのが見える。胸部には小さな球体がいくつか取り付けられている。

それは少年の真上で静止した。

デウス・エクス・マキナ
「機械仕掛けの神…… ロークイルダム」

神崎が呟く中、少年の身体が光となり紺色の巨人に吸い込まれていく。巨人の目が光り、そして少年の声が聞こえてきた。

「さあ、兄ちゃん。見せてくれよ。兄ちゃんの力をさ！」

廃墟に少年の明るい声が響く。紺の巨人、ロークイルダムが黒田を指差した。少年が操っているのだらう。戦いを要求している。

「乗って！」

ノルンの声と共に、ヴァルドギウスの手が黒田の目の前に差し出された。黒田は無言のままそれに乗り、ヴァルドギウスのコックピットへと侵入する。

「……あれが侵略者なのか？」

シートに身体を座らせながら、黒田は尋ねる。

「そう。侵略者。だけど、さっきの奴らとは全然違う。油断しないで」

ハッチが閉まる。黒田の周囲に光が現れ、景色が映る。目の前にいるのは紺色の巨人、ロークイルダム。

「準備はいいかい……兄ちゃん！」

少年の、シヨトルが叫ぶ。そしてヴァルドギウスに向かい、背部のスラスタを一気に吹かし、加速させた。その手にはコンバットナイフが握られている。

殆ど反射的に、黒田はヴァルドギウスを操縦する。

黒の巨人は上へと跳んだ。轟音が街中に響き、ロークイルダムの握るナイフは空を切る。そのままヴァルドギウスは大きく旋回し、ロークイルダムの様子を見る。

「逃げないでよ。楽しませてよ。折角なんだからさあ！」

ローキイルダムがヴァルドギウス同様、地面を蹴った。跳躍し一気にヴァルドギウスとの間を縮めていく。黒田はヴァルドギウスを後退させて差を開かせようとするが、それよりもローキイルダムの方が早い。背部のスラスタは、ローキイルダムのほうが高出力のようだ。

「退屈で退屈でしょうがなかったんだ。初めてだよ。こんな面白い玩具はさ。だから、僕の相手になってよ！」

ナイフが襲ってくる。黒田はそれを払い、蹴りを加える。

ローキイルダムが吹っ飛んだ。しかしその装甲にはダメージはない。内部で操縦しているシヨトルにも、衝撃はない。

「楽しいなあ。機械仕掛けの神同士の闘いつて。ねえ、兄ちゃんもそう思うだろう？」

無邪気な声が黒田の耳を打つ。外の音をヴァルドギウスがコックピットに伝達しているのだ。

「出て来い、グラム！」

再びシヨトルが叫ぶ。ローキイルダムは何もないはずのそこに、腕を突っ込んだ。空間が裂け、何もない場所から、それを引きずり出す。

「あれは……剣……？」

黒田の視線の先には、一つの巨大な剣があった。ローキイルダムはそれを振り回し、ヴァルドギウスへと切っ先を向ける。

刃が太く巨大な剣だ。ローキイルダムと同等の長さはある。振り回すには相当の駆動系が必須なのだろうが、ローキイルダムはそれを苦としていない。

「いくよ！」

ローキイルダムがそれを振るった。ヴァルドギウスにその刃が届かないとわかっていながら。

「避けて！」

それにもかかわらず、ノルンが叫ぶ。黒田は困惑しながらも、ヴ

アルドギウスを上昇させた。

直後。

黒田のいた場所が、何かに切り裂かれた。そしてそのまま見えな
い刃はつきぬけ、まだ辛うじて崩れていなかったビルを両断する。
何キロメートルもの先の建物だというのに、だ。

「な……」

その光景を捉えていた黒田は、驚きを隠せない。

「すごいだろう？これがローキイルダムの神器、グラムのかさ。兄
ちゃんのそいつもすごいけど、僕の機械仕掛けの神が最強だ」

ローキイルダムは刀を振るう。その軌道をなぞるようにして表わ
れる見えない刃は、ヴァルドギウスに襲い掛かってくる。

「グラムの能力は空間断裂」

ノルンは回避行動をサポートしながら告げる。

「あの剣で切りつけた軌道はどこまでも伸びて、あらゆるものを切
断する。所有者の意志によって切断したものをしなかった事にもで
きる。元々は観測者だけが持つ事を許されたもの。観測者だけに許
されていた、最強の剣」

グラムによるいくつもの断裂の刃の隙間を、ヴァルドギウスはす
り抜けていく。正確には、すり抜けるように仕向けられている。

シヨトルは遊んでいるのだ。自分の楽しみが長く続くように、決
定的な攻撃を繰出さず、黒田が見切れるギリギリの攻撃しかしてい
ない。

黒田が見えないはずの空間の断裂を把握しているのは、ヴァルド
ギウスとリンクし、さらにはノルンのサポートがあるからだ。それ
がなければ、二度目の攻撃の時点でヴァルドギウスは切断されてい
る。

「見せてくれよ兄ちゃん。さっきのアレをさ」

「シン、前！」

少女の声を聞き取った数秒後、ローキイルダムの腕が、ヴァルド
ギウスの右腕を掴む。それをかわそうにも、断裂の刃が目の前に迫

っついて、それを回避するのが精一杯だった。

「僕のローキルダムがグラムを所有しているように、兄ちゃんの
そいつも持っているはずだ。物理法則なんて完全に無視した、デウス機械
仕掛けの神だけが持つ、神器を！」

その声に対し、黒田は舌打ちを返す。

「さつきからごちゃごちゃうるせえんだよ、テメエは！」

罵声とともに、ヴァルドギウスの右腕に装備されたそれを発動させる。

「テイルウイング！」

光りを放ち、ヴァルドギウスの右腕がローキルダムのそれを粒子へと変えていく。そのままその右腕は紺の巨人の胸部を掴み、そして引きちぎった。

「は……」

ローキルダムのコックピットから、僅かに外の景色が見える。

それはモニターを通して出のものではなく、コックピット付近が傷つけられ、裂け目ができた為だ。

「すげえや！ローキルダムの装甲はレールガンの直撃を受けたって傷一つつかないのに！」

少年はローキルダムを後退させる。

「でもね、まだ終わらないよ！」

粒子へと変わったローキルダムの腕が、胸部が、瞬く間に修復していく。まるで生き物のように配線や鋼鉄が絡み合い、交じり合っていく。

「再生、した……？」

機械が再生。それも、短時間での事だ。ありえないはずのことだ。だが、それは目の前で起こっている。

ローキルダムの全身から、合計で十本のコンバットナイフが飛び出した。それは宙を舞い、その過程で刃を銃口へと変えていく。周囲を舞うそれらは不規則に動き回っている。

「兄ちゃんはこの攻撃を避けられるかな？」

純粹に、ゲームを楽しむかのような声。同時に無数の銃口がヴァルドギウスへと向かった。直線ではなく、曲線を描き、ヴァルドギウスを囲うようにして。

「シン、飛んで！」

ノルンの叫ぶ意味を、黒田は瞬時に理解する。少年が何をしようとしているのか、把握したのだ。ただでさえ回避で手一杯なこの状況で、少年はさらに手数を加えようとしている。それを未然に防ぐには、無数の銃口を振り切るしかない。

ヴァルドギウスが一気に加速した。スラスターを全開にし、最大加速で飛ぶ。

だが銃口は逃がしてくれない。ヴァルドギウスの飛行ルートを予測し、数機の銃口が代わる代わるヴァルドギウスに向かってビームを放つ。

光の線がヴァルドギウスの装甲を熱していく。右肩、そして胸部がが赤くなる。集中的に狙われている。

さらに、グラムから発せられた見えない刃が襲い掛かっていた。

「数三つ！目視できるようにしたから、避けて！」

黒田の視界には見えないはずの刃が見えていた。ノルンが目視できるようにフィルターをかけたのだ。黒田はそれを元に機体を隙間へと滑らせ、同時にビームを回避する。

隙を見て周囲を飛び回る砲を殴りつけようとするが、当たらない。当然といえば当然だ。銃口の大きさはヴァルドギウスの拳の二分の一もない。そしてヴァルドギウスと同速で移動できるだけの速さがある。拳のリーチでは、簡単に捉える事はできない。

刃の隙間を縫いながらビームをギリギリの所で回避していく。防戦一方だ。

「何か武器があれば……」

しかし、ヴァルドギウスには装備がない。ならばどうすればいいのか。

答えは簡単だ。創ればいい。

ヴァルドギウスが右手を掲げる。無数の鉄の塊がヴァルドギウスの手へと収束していく。押しつぶされた車の鉄、少し前に破壊された球体のロボットの金属、切断されたビルの破片。それらが真つ黒な球体となって、そして数秒、サブマシンガンへと姿を変えた。

「へえ、兄ちゃんのはそんなことまでできるんだね。便利だなあ」

「黙ってるよ、クソガキ」

シヨトルの言葉を一蹴すると、黒田はサブマシンガンは無数の砲へと向け、引き金を引いた。

宙を舞うそれらに銃弾が命中する。鋼鉄の弾丸が鋼鉄の砲へぶち当たり、めり込む。だが破壊には至らない。シヨトルはそれを知っている。

「無駄だよ、兄ちゃん。そんな子供だましじゃさ」

ローキイルダムがヴァルドギウスへ接近してくる。その最中にも空を飛ぶ銃口はビームを吐き出していた。

「そんなの、わかってる」

黒田は呟く。同時に、サブマシンガンを投げ捨てた。

ローキイルダムの動きが止まる。何故そんな事をしたのか、理解

できなかったからだ。直感がシヨトルを止めた、と言ってもいい。シヨトルは、何か、気味の悪いものを感じていた。

サブマシンガンが弾け、無数の黒い粒へと変化した。そしてそれらが無数の砲へと向かっていく。まるで、磁力でひきつけられた砂鉄のように。

黒の粒は銃口へとめり込んでいた弾に吸い付くと、それごと液体へと変換し、銃口を包みだした。計十機の砲台を、黒い膜が包み込んでいる。

「これは……」

シヨトルはそれに見入っていた。すぐそこで起きた不思議な出来事に吸い込まれていくように。

膜に包まれた砲台は、ヴァルドギウス的手中へと収まった。そして合計十機その全てが一つの球体となり、あたらな武器へと変貌する。

ヴァルドギウスの手にはやや大型の銃が握られていた。細長くバレルの伸びた銃だ。

ローキイルダムへと狙いを定め、撃った。

ビームがローキイルダムの右肩を貫く。ビームは貫通し、そのまま人気のない街へ直撃した。死体の転がる道路にはクレーターができ、周囲の肉は一瞬で蒸発したか、焼けた。

「めり込ませた弾丸によって高速移動する物体に明確なターゲットを指定、作り出したそれで包み込む事で僕の砲台を吸収したのか……」

「無茶苦茶だよ。本当に、無茶苦茶だ」

操縦桿を握り治しながら、シヨトルはつばを飲み込んだ。そして笑う。ゲームを楽しむように。

「楽しいなあ。楽しいよ、兄ちゃん」

ローキイルダムの右肩が再生していく。同時に新たなコンバットナイフが精製され、それが砲へと変化していった。

「こんな緊張感、久しぶりだ！」

少年の叫び声が、二体の巨人の駆動音とともに廃墟に木霊する。

死にたくない。そう思いながら生きてきた。

毎日が下らないと思いつながら、生きる価値がないと考えながら、それでも死ぬ事はできなかった。

なくなるのが怖かった。終わるのが嫌だった。

だから生きていた。だから今も生きている。

誰かの為などではない。自分のために。

そう、死ぬのが怖い。生きることには何の意味もない

ヴァルドギウスの装甲にはいくつもの傷が刻まれていた。ビームの熱で装甲が爛れている。頭部の一部が破損し、左腹部には巨大な傷跡が存在している。

四方八方から襲い掛かる光線を避けながら、刃を避ける。そしてギリギリで回避しきれずに喰らう。致命傷にはならない。だが、確実に傷を刻む。

クソ……ッ！

心の中で黒田は毒づく。

ヴァルドギウスの構えたライフルからビームが打ち出された。それは一瞬で目標、つまりローキルダムへと命中するが、しかしその数秒後には再生が始まってしまふ。周囲を飛び回るビーム砲を打ち落としても、新しいそれを作り出されてしまふ。

「まだまだあ！」

ローキイルダムが高速で接近してくる。無数のビームに気をとられていた黒田は、ノルンの発する警告に意識を向けられず、それを許してしまう。

「シン！」

少女の声と同時に、グラム之刃がヴァルドギウスの腹部に食い込む。何物をも両断する神器が、ヴァルドギウスを貫いた。

コックピットが揺れる。ノルンの悲鳴と黒田のうめき声が入り混じった。視界が滅茶苦茶になりながら、それでも黒田はなんとかローキイルダムからヴァルドギウスを引き剥がした。鋭利な刃が機体から離れる。

荒い息を漏らす。額には汗が滲んでいた。心臓は強く鼓動し、身体はほんの少し震えている。

こいつ、少しずつ本気になってきやがった。隙がなくなってきた。

最初の頃は手を抜き、遊ぶように闘っていた相手だが、今は違う。攻撃の一つ一つに、抜け道がなくなってきた。本気で狩にきはじめている。

「ふふふ……面白いなあ」

少年は空中を飛行する複数の砲台で黒田を撃つ。黒田はそれを避ける。だがそれだけだ。肉弾戦に持ち込もうにも、ローキイルダムの持つグラムのせいで、うかつに近づくと事ができない。

「他の星の奴らは皆、手ごたえがなかったんだ。デウス・エクス・マキナ機械仕掛けの神がなくなつて、簡単に制圧できた。何も楽しくなかった。けど兄ちゃんとは違う。すごいよ。全然死なない！最高の相手だよッ！」

ローキイルダムの振るう刀の軌跡が、そのままにヴァルドギウスを襲う。何とか機体を滑らせ、黒田はそれをかわした。だが完全にはない。左腕をそぎ落とされてしまった。

「く……っ！」

左手に握られていた、地面へと落下しつつあるライフルを拾い、照準を定めた。そして何度も引き金を引く。しかし、ローキイルダ

ムは無駄なく回避し、たとえ命中したとしても、すぐさまに再生してしまう。

「もつとだ。もつともつともつと、僕を楽しませてよ」

ローキルダムは砲撃をかくぐりながら接近してくる。ヴァルドギウスは全方位攻撃を上手く避けながら距離をとろうとする。

だが、確実に二機の距離は詰まってきた。条件が違い過ぎる。

黒田の脳裏に光景が浮かぶ。光に貫かれ、消え去る己の姿。刃に切り裂かれ、絶命する己の姿。あるいはその両方によって焼き裂かれる己の姿。いずれも、結果は死だ。

死んでたまるか。

黒田は思い出す。自分の母親の死体を。その愛人の亡骸を。それは何者でもなかった。それはただの死体で、それだけだった。生きていて呼吸していた時にどんなにすばらしい人間でもどんなに最低な人間でも、息絶えればそれらは全て等しく死体だ。

死んだらどうなるのか。そう考えた時のあの感覚。己が消える、底なしの恐怖。それが今、目の前に迫ってきている。

「死んでたまるかよ」

黒田は無意識の内に呟いていた。汗はあふれ出す。心臓はさらに強く鼓動する。

操縦桿を握る力が強くなった。視界のあらゆる場所から襲い掛かる攻撃をかわす。視線を絶え間なく動かし、迫りくるビームを避けていく。

一瞬たりとも気を抜く事ができない。動きを止めればやられる。動きを読まれてもやられる。攻撃の軌道を完全に見切り、予測し、行動を選択しなければならぬ。

だからローキイルダムが接近してくる事に気づけなかった。

「シン、目の前に！」

ノルンの警告に気がついたときはもう遅かった。モニターの左側、そこにはグラムを握るローキイルダムの姿がある。今まさに、大剣を振り下ろそうとしている。

直後、ローキイルダムが吹っ飛んだ。いきなりだった。前触れもなく、紺色の巨人は見えない何かに弾き飛ばされる。

何が起こったのか、黒田は理解できなかった。ノルンも同様のようだ。

「黒田君、聞こえるか」

声が聞こえる。神崎が宙に浮いていた。まるで透明な床の上に立っているかのようだ。

こいつがやったのか。

黒田は直感する。ローキイルダムを吹き飛ばしたのが神崎だと。

「機械仕掛けの神には再生能力があるんだ。コアを破壊しない限り、再生は続く」

「だったらどうしろって言うんだよ」

「ティルウィングを使え」

神崎は静かに言い放った。

「その拳でコアを破壊すれば、機械仕掛けの神は消滅する。ヴァル

ドギウスはそのための機体だ。君ならできる」

「何を根拠に」

モニターに映る神崎は、黒田に微笑んでいる。神崎からは黒だが直接見えるわけではない。だが、確実に見ていた。

「俺はそう信じてる」

その一言は黒田にある感情を抱かせる。どろどろとした、赤く、黒く、渦を巻いた感情を。何もかもがぐちゃぐちゃに入り混じってしまったような感情を。

その感情を、黒田は抑える事ができなかった。

「信じてるだと？ テメエに、俺の何がわかる！」

モニターに映る神崎を黒田は力いっぱい殴る。画面がひび割れ、破片が黒田の手に刺さった。血が滴り落ちる。モニターは修復を始めている。罅割れた場所が時を巻き戻すかのように、元通りになっ
ていく。

神崎は笑っていた。そうなる事を知っていたかのように。

「わかるさ。なんてったって、君と俺は」

その声を掻き消すかのように。

「勝負の邪魔すんなよ、ウォッチャー 観察者ア！！」

少年の叫び声が周囲に響く。ローキルダムが一直線に神崎へと向かい、その巨大な鋼鉄の手を伸ばした。

神崎は光の壁を造り、それを防ぐ。だが数秒もしない内にその壁にヒビが入る。

「死ね、死ね、死んじゃえよ！」

ローキルダムの手が光の壁を破壊する。鋼鉄の両手を遮るものはなくなった。それを避けようにも、神崎にはもうその余裕がない。今から逃げようとしても遅い。

男は諦めた。一步も動かない。その代わりに視線を黒田に向け、言った。

「後は頼んだ」

そして、神崎が押しつぶされた。ローキルダムの指の隙間から、

血と押しつぶされた内臓が勢いよく漏れ出す。

ほんの一瞬の出来事だった。

死んだ。

黒田はその一部始終を見ていた。動く事ができなかった。

ローキイルダムの手が開かれる。そこにはボロボロになっていたところがちぎれた、黒いスーツとズボンあった。それ以外はない。真っ赤な血が塗りたいくらいに塗られている以外は、何も無い。

人の姿など、そこにはなかった。

死にやがった。

黒田は震えていた。前のめりになり、足元を視線を固定している。前方の敵に対し、一切意識を向けようとしない。

神崎の死を、悲しんでいるわけではない。

男は、黒田にとってどうでもいい存在だった。ついさっき会ったばかりの、謎の奇人。超能力の使える、得体の知れない、なれなれしい男。そうとしか思っていなかった。

それなのに黒田は震えている。理由は黒田自信にもわかっていない。目の前の死に、恐怖しているのだ。

「シン、シン！」

ノルンの声を無視しているわけではない。聞こえていないのだ。

ローキイルダムがヴァルドギウスを蹴り飛ばす。されるががまま、黒の巨人は吹き飛んだ。衝撃が二人を襲う。ノルンが悲鳴を上げる。間髪いれず、ローキイルダムがヴァルドギウスの右肩を切断した。続けて左脚、そして右脚。四肢を切断されたヴァルドギウスが、空中を舞う。

計十機の砲台から放たれたビームが、ヴァルドギウスの装甲を貫通していく。動く事すらままならない巨人は、されるがままに全身にそれを受けた。胸が消し飛ばされる。残っているのは、もう胸部と頭部だけだ。

「あれー、兄ちゃん、もうやる気無くしちゃった？^{ウォッチャー} 観察者を殺されたのが、そんなにショックだった？」

人間は死ねば、等しく死体。それはつまり、平等に消えてなくなる、ということ。

黒田は神を信じていない。だから死後の世界も信じていない。怖い。

死ねば消える。絶対の主観が消滅する。それはとても悲しく、恐ろしい現実。黒田にとつての、揺るがない定義。

「闘って！でないと、このまま……っ！」

そう、闘わなければ死ぬ。わかっているのに、黒田は動けない。ヴァルドギウスの頭部までもが消し飛ばされた。モニターから光が消える。コックピットの中が真っ暗になる。

重力に逆らえず、胸部だけのヴァルドギウスが街中に激突した。死体だらけの地面に、ヴァルドギウスがクレーターを造る。

「楽しかったよ、兄ちゃん。久々にとつても満足した。でもね、僕は侵略者なんだ。本当は兄ちゃんともつと遊びたいけど、でも我慢しなきゃいけない……だから、これで最後だ」

シヨトルが二本のグラムを向けた。その鋭い刃の先には、ヴァルドギウスが存在している。

「はは……はははは……」

力なく黒田が笑う。その眼差しは暗い。

俺も死ぬのか？

人が死んだ。その前に何度もそんな光景を見ていたはずなのに、しかし黒田の脳裏には神埼が押しつぶされるその瞬間が焼きついている。サラリーマンや学生が銃弾に貫かれて押しつぶされても、心を痛めなかったというのに。

それが何故なのか、黒田にはわからない。

嫌だ。そんなの嫌だ。俺は死にたくない。

だから。

黒田は顔を上げる。視界は真っ暗だ。何も見えない。無音が支配している、擬似的な無だ。

後は任せた。

神崎の言葉に答えるように、操縦桿を握る。

「テメエのためじゃねえ。俺のために、だ。」

深く息を吸い込み、叫んだ。

「動きやがれよ、ヴァルドギウス！」

黒田が叫ぶのと同時に。

周囲の全てのものが、真っ黒な粒子へと姿を変えた。

道路も電柱も建物も瓦礫も車も自転車も死体も、周囲の何もかも黒い粒となり、ヴァルドギウスへ集まっていく。道路のコンクリートは抉られていき、建物の外壁は溶けるように無くなっていく。

ヴァルドギウスの欠落した部位が黒い粒によって補われていく。それは次第に装甲の形をとり、鋼鉄の腕、脚、頭部へと変貌していった。

「周囲の物質を取り込んで、自分のものにしてるのか……」

次第に復元していくヴァルドギウスを身ながら、シヨトルが口元に笑みを浮かべ、呟いた。

ローキイルダムは空中に静止している。グラムは構えたままだ。全ての部位が再生した。

黒い巨人が起き上がる。背中には黒い羽が生えていた。

それは先程のウイングとは違う。機械的ながらも、鷲の翼を連想させる羽。真っ黒なそれは大きく広げられている。

ヴァルドギウスが右腕を掲げた。黒い粒が収束し、手の平の上に球体を作り出す。次第にそれはライフルへと変貌していく。右腕にそれを持ち、引き金に鋼の指をかけた。

ヴァルドギウスの目が強く光った。低く雄雄しい咆哮が響き渡る。巨大な翼を展開し、黒の巨人が跳躍した。

一瞬でローキイルダムとの差を詰める。ライフルの銃口がローキイルダムの装甲に押し付けられた。

「ぐっ！」

シヨトルは反応しきれない。少年が操縦桿を動かすよりも早く、銃口からビームが放たれた。ローキイルダムの装甲を光の矢が貫く。その後、ローキイルダムはヴァルドギウスから距離をとるためにバリアを噴射する。

だがそれはあまり意味を成さなかった。

ヴァルドギウスはライフルを連射する。ローキイルダムは瞬く間に装甲を消失していき、いくつもの穴を作り出した。再生を行う暇を与えない。修復しかけた瞬間にビームが襲い掛かる。

「本気か。本気なんだね、兄ちゃん！」

その中でも、シヨトルは笑っていた。嬉々とした表情で、前のめの姿勢で、操縦桿を強く押し出した。

「でも僕だつて負けないよ！」

ローキイルダムが黄金に輝いた。その輝きはビームを反射し、機体の傷を修復していく。

デウス・エクス・マキナ
機械仕掛けの神が放つその光は、まさに神の光だった。ありとあらゆるものが照らされる。神々しい光はあたりのものを直射していく。

崩壊していた建物が、瓦礫の山が、ヴァルドギウスに吸収されていた場所が、少しずつ修復していく。光を浴びたものが全て、元の

姿に戻ろうとしている。再生だ。

「さあ、やろう。これが真正銘の、最後だ！」

ローキイルダムが無限とも思える数のコンバットナイフを生み出す。数百、数千ものそれらがヴァルドギウスを囲った。さらに、一本のグラムを空中に精製する。両手に持っていたグラムとあわせ、十三本の神器がローキイルダムの装甲に吸い込まれていく。

ローキイルダムが姿を変える。装甲は金色に光り輝き、鋭さを増した。ボディのいたるところに文字が刻まれている。その手が、指が、頭部が、脚部が、全てが鋭く尖っていく。手首や足首あたりに金色のリングが巻かれている。

「完全態……」

十三本のグラムを取り込んだローキイルダムを見て、ノルンは恐怖した。

「いくよ！」

ローキイルダムがその手を振るった。ヴァルドギウスを囲んでいたナイフが一斉に襲い掛かる。三百六十度全方位、逃げ場はない。切っ先が高速でヴァルドギウスに迫る。

再び、ヴァルドギウスが吼えた。

ライフルを捨て両腕を伸ばし、真横に開く。手の平を見せる。

右腕が輝いた。

数千のナイフが一つ残らず全て黒い粒子となる。

「すげえ！」

ローキイルダムが突進していく。途中、金色の大剣を自らの手の平から引き抜いた。輝くその刃でヴァルドギウスを切り裂こうとする。

ヴァルドギウスはそれを黒い光の壁で防いだ。ローキイルダムの肘や腕が壁に激突し、あたりに衝撃を生んだ。刀を振り切る前に、そのモーシヨン事態を妨害したのだ。

金色の大剣の描いた軌道から、グラムと同じく刃が発せられる。無色ではなく、黄金に輝いている。それはありとあらゆる建物を破

壊しながら地面に激突し、そして直径一キロメートルほどの爆発を起した。

二機を爆風が襲う。だが、二機は全く動かない。力は完全に拮抗している。いつの間にか、ヴァルドギウスは黒いオーラを纏っていた。ローキイルダムと光とは違い、禍々しい真つ暗な光。周囲のあらゆるものを粒子に変えて取り込み、自らの力としている。

ローキイルダムがもう一方の腕から光の剣を生み出す。そしてそれを黒い壁へ突き刺した。

ヴァルドギウスが空中を跳躍する。直後、壁を打ち破り、光の衝撃が地平線のかなたへ消えていった。

ローキイルダムが上空へ視線を向ける。そこには、右腕に漆黒の光を纏ったヴァルドギウスの姿があった。黒い粒子が右腕に高速で収束していく。真つ黒なそれが何もかもを飲み込んでいく。

「ぶつ潰してやる」

そう呟いた黒田の顔は、暗く歪んでいた。

ヴァルドギウスが唸る。何もかもを破壊する絶対の拳を、つまりテイルウィングをローキイルダムへ向けて構えた。

「それはこつちの台詞だよ！」

両手に光の刃を握ったローキイルダムが、真つ直ぐに向かってくる。

拳と刃が激突した。黒い波動と光の輝きが激突する。

拮抗。だがそれは数秒の事だった。金色に輝く光の刃にヒビが入った。間も無く黒い拳によってそれが破壊されていく。

そのまま、ヴァルドギウスの拳がローキイルダムの胴体を殴りつけた。胴体は深く抉られる。そこから、金色の装甲を黒い亀裂が被っていく。

装甲にめり込んだヴァルドギウスの拳が、その内部の光り輝く球体を破壊した。

ローキイルダムが吹き飛ばされる。それでもなお、シヨトルは笑っていた。

「ははは……すげえ、兄ちゃん。でもまだ致命傷じゃない。僕に致命傷はないんだよ。機械仕掛けの神は無限に再生するんだ。兄ちゃんの勝ちはず絶対じゃないんだ。このゲームは僕が、僕が……」

シヨトルは異変に気がつく。モニターが、真つ暗な何かに埋め尽くされているのだ。

ローキイルダムの光が輝くその装甲は、暗闇に包み込まれていた。装甲は再生せず、黒い亀裂は機体の隅々にまで走り、その機体から金色の輝きを消失させている。

「なんだ？修復が始まらない？なんで？さっきは再生したのに？どうして？」

シヨトルは動揺し、しきりに視線を動かした。だがその先にあるのは全て暗闇。真つ暗な空間。

少年を恐怖が襲う。

「嘘だ。まさか、僕が」

次の瞬間、ローキイルダムが黒い粒子となって、消え去った。

インターバル 1 (前書き)

久しぶりに更新です。

インターバル 1

廃墟の中にヴァルドギウスを隠し、黒田とノルンは街中を歩いていた。

周囲の死臭は薄れている。ローキイルダムの光が、死体の傷を修復していた。しかし所詮は死体。時がたてば腐敗が進むだろう。

「心配しないで。ヴァルはいい子だから、静かに待ってるよ。呼べばすぐに来てくれるし」

「そういう問題じゃねえ」

屈託のない笑顔で顔を覗き込んでくるノルンを一瞥し、黒田はそっけなく呟いた。

「これからどうするの？ やっぱり、侵略者たちと闘う？」

「……勝手にするさ」

一瞬神崎の声が脳裏にちらついていたが、黒田はそれを無視する。壊れきった街を見回した。

いつの間にか、二人は通学路の道に出ていた。ローキイルダムと戦っているうちに元いた場所に戻っていたのだろう。

見慣れた景色は全く違うものへ変貌していた。建物はどれもが破損している。道には銃弾の跡がいくつもある。

所々損傷が再生しているとはいえ、街には瓦礫が溢れている。道路にはコンクリートの破片が転がっている。二人は車道を歩いているのだが、窓ガラスの割れた自家用車やひっくり返ったトラックなどが停車していた。電柱は何本も折れ、車の上のしかかっている電線がちぎれ、道に広がっている。

世界は崩壊した。疑う余地もなく、壊れてしまった。

恐らく球体のロボットは世界中に降り立っているのだろう。ある

程度の抵抗はなされているのだろうが、全てに抵抗するのは不可能だ。ミサイルが通じたとしても、世界中のあらゆる場所に同時に放てるわけではない。黒田が破壊したのは周辺のロボットだけだ。数十キロ離れてしまえば、稼働している手足を生やした球体のロボットがいるはずだ。

ああ、落ち着く。

人の気配を感じない世界を前にして、黒田は口元に笑みを浮かべる。

無くなってしまうばいと思っていたモノが無くなった。いらなくていらなくなってしまうがなかったものが消え去った。まるで害虫を踏み潰した時のように、黒田は残虐な安堵を示していた。この瞬間にも何処かで誰かが殺されているということを知っているのに。

「君はこれで満足なのかい？」

背後から声がある。黒田は反射的に振り向く。

「生きてたのか」

「まあね。サーバーが無事なら問題ないんだよ。身体なんていくらでも再生できる」

そこには神崎が立っていた。黒いスーツを着て、ネクタイを締め、抹茶のソフトクリームを頬張っている。

そういえばそんな事、言ってたな。

神崎自身はデータだと言っていた。本体はここではない何処かにあるサーバーの中にあるのだろう。だから肉体がなくなっても精神に当たるものが消えない。だから問題がない。そういうことなのだろう。

「どうだい、感動したかい？」

「別に」

「うーん、相変わらず手厳しい」

にやにやと神崎が笑う。

「ところで、君に報告があるんだ」

それを告げるのが目的だったのだろう。

「君の学校、守つといたから。気が向いたら行ってみるといいよ」
「それで？」

それが何だと言うんだ、と告げるように、尋ねる。しかし神崎はそれに答えることなく、背を向けた。

神崎は空中で指を滑らかに滑らせる。それをなぞるように、空間が切り取られる。その切り取られた部分は別の何処かと繋がっている。廃墟である事から、この近くのどこかなのかもしれない。

黒田は舌打ちをする。が、神崎はそれを気にする様子はない。

「じゃ、俺は用事があるから」

神崎は円に自らの身体をくぐらせ、消えていった。空間の裂け目は徐々に小さくなっていき、消滅する。

黒田とノルンは取り残される。

「絶対に行くべきだよ」

黒田の手をノルンが握った。その眼差しは強く、黒田を見つめている。

「何でだよ」

鬱陶しそうに手を振り解こうとするが、しかしノルンの手は離れない。

「だってそうでしょ。友達や先生が生きてるかもしれないんだよ！？」

「別にどっちでもいい。興味がない」

「どうして…」

廃墟にノルンの声が木霊する。強く耳を打つその声に、黒田は顔をしかめた。

すぐには答えない。言うべきかどうか、迷っていた。ノルンの眼差しから視線を逸らし、虚空をなぞる様に泳がせる。

「無いものはないんだよ」

搾り出すように口を開く。だが、納得するようなノルンではない。「友達だって、きつとシンに会いたがってるよ」

黒田はさらに顔をしかめる。

「友達なんていくらでもいるだろ」

「どういう意味？」

「お前の言う、友達ってなんだ？」

黒田は吐き捨てる。

「他人は所詮他人だ。絶対的に変わらないのは自分だけで、他は全部替えが利く」

「そんなことない」

「本当に必要としていない相手を、あたかも必要としているかのようには振舞う。求めているのは『他の誰か』であって、明確な『誰か』じゃない。だから俺は、誰が生きていようと死んでいようとどうでもいい。俺が死んでさえいなければ」

「そんなの、悲しすぎるよ……」

ノルンの目に涙が浮かぶ。そのまま泣き出してしまった。

黒田はそれ以上何も言わず、歩き出す。一人になるうと思った。

聞こえてくる泣き声が鬱陶しくてたまらなかった。

しかし、いくら歩いてても歩いてても、泣き声は聞こえてくる。

背後に視線を向けると、泣きじゃくりながらもノルンがついてきていた。

「泣くならついてくんなよ」

「……ヤダ」

「じゃあ泣くな」

ノルンは何も言わない。聞こえてくるのは、嗚咽だ。

しばらく、黒田はそのまま歩き続けた。その間もノルンは泣き続ける。何も言わないが、ずっと泣いていた。

「あー、面倒くせえ……」

一時間くらいした後だろうか。黒田は根負けした。少女の抵抗を無視し続けられなかった。

「行けばいいんだろ、行けばよ」

ノルンの顔が、見る見るうちに明るくなっていく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4838v/>

機械仕掛けの神

2011年12月18日03時03分発行